

■令和4年4月4日 定例記者会見内容

- 1 日 時 令和4年4月4日（月）11：00～12：00
- 2 場 所 市役所本庁舎3階第二委員会室
- 3 出席者 ○市長、総務部長、危機監理監、企画部長、地域創生部長、
市長公室長、危機管理課長、企画調整課長、交流観光課長、
社会教育文化課長
○酒田記者クラブ10社（河北新報、荘内日報、山形新聞、毎日新聞、
読売新聞、TUY、YTS、YBC、NHK、SAY）

■市長発表事項

1 酒田駅前交流拠点施設ミライニの中央図書館オープン等について

市長／それでは最初に私の方から、酒田駅前交流拠点施設ミライニの中央図書館オープン等についてということで、発表させていただきます。ご存知の通り、一昨年11月に先行オープンをしておりまして、駅前の再開発ビルでありますけれども、5月5日、こどもの日、中央図書館がオープンするという運びになったところでございます。詳細はお手元の資料に整理をしておりますけれども、それに先立って4月30日に市営の立体駐車場が供用開始になります。

いよいよ図書館本体が稼動するというところで、今までは観光案内施設があったり、或いは勉強スペースで高校生が一生懸命受験勉強していたりという雰囲気での使い方だったわけですが、文字どおり図書館として機能を発揮することになりますので、ご期待いただきたいなと思っております。

4月30日に立体駐車場を先行オープンいたしますが、中央図書館におきましても、4月30日からイベントを開催するほか、新規利用登録の受付なども図書館としてのサービスは4月30日から開始をしたいと思います。

5月5日の図書館オープン当日でありますけれども、一般利用者の皆様には、午前10時からの開会セレモニーが終了次第、午前10時40分頃から入館をご案内する予定でございます。セレモニーを少しやらせていただきますけれども、その後、一般の方からも入っていただいて、ご利用いただきたいということでございます。当日は、テープカットですとか、或いは浜田小学校児童による太鼓の演奏ですとか、光陵高校の吹奏楽部の演奏などを予定しております。そちらの方もぜひご取材をお願いしたいと思います。

それから、現在、立体駐車場とバスターミナルも含めてB棟を建設しておりますけれども、中央の広場やバスベイ等も含めてすべて完成するのが、7月中になっておりますので、8月1日にグランドオープン、全館完成ということで、オープニングを予定しているところでございます。

ホテル、それからマンション、そしてミライニ、さらには全体の施設ということで段階的にオープンする形になっておりますが、いよいよ8月1日には、全面グランドオープンということでなりますので、是非よろしくお願いをしたいと思います。私からは以上でございます。

記者／改めて伺いたいのですが、中央公民館の方、今まで図書館になっていた中央公民館のこの位置付けや利用方法はどうなるのか。

市長／これはまだ仮称ですけれども、文化資料館として、いわゆる公文書だとか、資料館もあるのですが、かなり手狭になってきているものですから、そういった資料の文献だとか、或いは光丘文庫、これもまた図書館の分館として位置付けされている郷土資料だとか歴史的な資料を集めた図書館があるのですが、それが今、中町庁舎というところにあって、それを全部移しまして、いわゆる公文書館兼文化資料館という形で、再生させたいと思っております。

元々が図書館だったので、その文書等の保管についてはその機能を持っていますから、公民館ということもあって人も来やすい雰囲気、駐車場もありますし、光丘文庫、文化資料館という機能をそこに持たせて、駅前の中央図書館と、旧中央図書館になったところは文化資料館として両方活用できればなというふうに思っております。

記者／その方針というのはもう決めているのですか。

市長／はい、決めております。今、もう駅前への引越しを基本的に終わりましたので、仮称ですが、文化資料館の整備にこれから入ります。

内部の設計をして、ちょっと造作を加えてそれが今年度です。引越しかいろいろ資料ありますからそういうものをそこに全部集合して、令和6年の4月に文化資料館をオープンするという形になります。

記者／市民のサークル活動とかも中央公民館でやっていましたけども、その辺は。

市長／文化センターの中央公民館というのはありますので、部屋自体は全部残ります。いわゆる前の中央図書館の空いたところに、入るというイメージです。

記者／図書館が移転するみたいなの。

市長／そうです。

市長／せっかくなので、新しい図書館の売り物というか、図書館長が社会教育文化課長になりましたから、ちょっとPR、どういう機能が売りかななどを少し補足させていただきます。

新しい機能ということで自動返却の機能だったり、予約棚システムの採用だったり、デジタルサイネージを作るとか、いろいろな新しい売りをちょっとご紹介いただくといかないと思います。

社会教育文化課長／中央図書館の新しい機能サービスについてですけれども、まず自動返却と言って、持出した本を図書館に返却していただく際に、これまでは基本的にはそのカウンターの職員を通して、手作業で返却処理をしていたのですが、今度は図書館の入口に自動返却用の窓口というのがありまして、そこを通すと自動で返却処理がなされるということで、これまでは手作業の処理が終わらないと、次の本が借りられないという方が結構あったのですけれども、そういうご不便をおかけしないようにできるというのがまず一つあります。

それから自動貸出機はこれまでもあったのですけれども、これは大幅に台数が増設されます。これまで2台しかなかったのが、7台に増やされます。

それから、予約棚システムといいまして、これもこれまでは、窓口の職員を通してでないと、予約した本を受け取ることができなかったのですが、今度はその専用の予約本のコーナーというのがありまして、機械処理して、なお、利用者が自分でその予約本を借りていくことができるというシステムが、新たに導入されております。

あとは、デジタルサイネージという様々な情報を見ることができるモニター画面ですか、それが大型のものが導入されております。

あとは、蔵書検索用の機械も、これまでは2台あったのですが、今度6台に増設されております。

あと2階の方に、郷土作家コーナーといいまして、これまではそういう常設のコーナーはなかったのですが、郷土の作家例えば吉野弘であるとか、土門拳であるとか、そういった方々を紹介する専用コーナーを設けております。以上のようなところとなります。

■代表質問

【ウクライナ難民の受入れの検討について】

記者／ロシアのウクライナへの侵攻に関するものが2点ございまして、まず1点目ですけれども、ウクライナの人道支援、避難民の受入れなどを、今現在酒田市の方で検討されている対応というのはございますか。

市長／はい。結論から言いますと、積極的に受け入れをしていきたいとこのように考えております。

市内に事業所を持っておりますご存知のプレステージ・インターナショナルさんの方では、積極的にウクライナからの避難民に対する人道支援にあたりたいという話がございまして。秋田県と、秋田市とが、連携して進めているということもあるのですが、酒田市といたしましても、同じようなスタンスで、人道支援という立場で、避難民の方、もし酒田市を希望する方がおられれば、積極的に受け入れてきたいとこのように考えております。

プレステージ・インターナショナルさんに関して言いますと、実はプレステージ・インターナショナルさんが出資している、アメリカのIT企業さんの社長さんが、ウクライナの方だということもあって、支援をしたいという、そういう意向をお持ちでして、その拠点である秋田市に話がございました。酒田市としても、全く同様の視点で、プレステージ・インターナショナルさんと一緒になって、もしウクライナの方で、酒田に避難したいという方がいれば、行政としても積極的に支援をしていきたいと、このように考えております。

国の方ではいろいろな動きがあって、報道によりますと、アジア福祉教育財団難民事業本部に委託をすることで、受入れをということで進んでいるようですが、実際、政府専用機で、20名の皆さんがやってくるとか、いろいろな話が今進んでいるようですが、いずれにしても、酒田市としてもプレステージ・インターナショナルさんと一緒に、受入れについては考えていきたいと、このように思っております。

手続き的な話ですけども、市として受入れる意向があれば、出入国在留管理庁へその

旨の表明もしなければならぬということでございますので、今その表明に向けて準備を進めている最中でございます。

行政としては、生活物資面での支援ですとか、或いは就業の場の支援、通訳支援、或いは子供の教育など、様々な課題がありますが、できるだけ支援をしていきたいと、このように考えているところでございます。

なお、全く参考でありますけども、3月末現在で、ウクライナ国籍を持っている方が2名酒田市にもいらっしゃるということでございます。その方が避難されているかどうかというのはまた別の問題なのですが、全く縁がないところではないということからも、しっかり避難民の受入れの検討については進めていきたいと思っております。以上であります。

【姉妹都市ジェレズノゴルスク・イリムスキー市との今後の交流への影響について】

記者／ウクライナに関連してですが、ロシアですが、姉妹都市のジェレズノゴルスク・イリムスキー市と酒田市さんの友好都市としての関係もありますが、今後の交流への影響というのは、現時点でございませうか。

市長／はい、これも結論から申し上げますと、やっぱり影響は否めないと、このように考えております。やはり、基本的にはロシアのウクライナ侵攻については、どのような事情があるにせよ、その武力による問題の解決は、これは決して許されるものではないと、私どもも、日本国と同じような立場で考えております。

ただ、これは戦争という事態になるとよく問われることなのですが、ロシア連邦という国家としてはそうかもしれませんが、姉妹都市の皆さん、ジェレズノゴルスク・イリムスキー市の皆さんとか、或いはロシアの国民の皆さん、それからロシアの文化だとか、そういったものについては別に非難すべきものではないと思っておりますので、その交流だとか、そういったものに対する理解については、何ら、これまでのスタンスとは変わるものではないです。ただやはり、こういう国同士の事情、現状、このような状況にあるということを踏まえまして、今後の交流について言えば、このような事態の状況が変わらない限り、やはりちょっと影響を受けてくるだろうと、このように考えております。

これまでジェレズノゴルスク・イリムスキー市とは40年以上も交流を続けてきていましたので、このようなことで、この交流の絆がそがれるっていうのは、大変、残念至極としか言いようがないのですけれども、現状としては影響受けるのは致し方ないかなと、そんな思いであります。

お手元にジェレズノゴルスク・イリムスキー市の市長宛の私の書簡が参考として添付をさせていただきました。実は以前、酒田の本間家の様々な資料の展示をサンクトペテルブルクでやったのですが、同じようなことで、そういう交流を、その展示会をしませんかという申し出が実はありました。だけど、我々は、ウクライナ侵攻これがなければ前向きに検討しておったのですけども、こういう状況なので、そこは難しいのかなというふうに考えております。ジェレズノゴルスク・イリムスキー市の市長さんには、こう

いった文書を差し上げて、もうちょっと状況が改善するまで少し時間をいただきたいというふうなことで、交流事業については、現時点では保留をさせていただいているという状況でございます。

あわせて、サンクトペテルブルク市の関係も同様でございます。前も記者会見の時にちょっとお話ししましたが、サンクトペテルブルク市から3月7日の私の誕生日にお祝いのメッセージを实际いただいております。それに、返信をしなくてはいけなかったわけですけれども、その間にこういった事態になりまして、そしてサンクトペテルブルク市の対外関係委員会の副委員長さんからは、ロシアがこのようなことに至った事情についても、一定の釈明のような文書も私のところにきていたのですが、その返信という形で、サンクトペテルブルク市の対外関係委員会の副委員長さんに、文書を差し上げております。

これにつきましては、誕生日にお祝いのメッセージをいただいたことについては感謝をしつつではありますが、やはり今のこのような状況については、我々としては、承服できないということで、とりわけ、サンクトペテルブルク市も酒田市もそうですが、これは会長が広島市長になっておりますが、平和首長会議という組織の中で皆一員になっているわけです。そのような状況で、我々も、世界の恒久平和を願っている立場からすると、今回のそのロシアの行動というのはやはり、許すことはできないということ、明確に私の意見として述べさせていただいて、返信を出させていただきました。これも文書資料として付けておりますので、後でご覧いただければなと思っております。

今回のウクライナ状況についてはそのような対応をさせていただいているということでございます。

【公益大公立化に向けた県との協議は進んでいるか】

記者／続いて東北公益文科大学の公立化についてですけれども、県との協議の進展について、どのように進んでいらっしゃるかというのを教えてください。

市長／これも結論から言いますと、あまり進んでこなかった。令和2年度、3年度に、それぞれ2回ずつ担当レベルで事務打合せは行ってきているわけですけれども、具体的な前進が何か図られているかというところと全くそういう状況ではございません。

先般、県議会で、知事さんもお答弁されて、しっかり取り組んでいくというお話でございましたので、そういう意味では、令和4年度の展開については非常に期待をしたいと思います、このように思っております。

具体的に言うと、県庁の中にそういう推進組織をしっかり作ってもらって、作業を進めるというのが一番いいかなと思っております。ただそこまでの話は県当局からもきておりませんので、今後の展開に期待をしたいと思います。

先頃3月29日、東北公益文科大学の理事会と評議委員会がありまして、公立化に向けた対応を進めることを盛り込んだ学校法人の計画が、承認をされたところでございます。私は都合でそれには出席できなかったのですが、その場には、平山副知事が副理事長という形で出席をされておまして、しっかり取り組んでいくというお話をされた

伺っておりますので、平山副知事の手腕に期待をしないと、このように考えているところでございます。

【市の大地震への備えと今後の災害訓練の予定について】

記者／4点目の最後の質問になるのですが、3月16日の夜、酒田市でも震度5弱を観測しましたが、市の大地震への備えと今後の災害訓練の予定というのは、一体どのようになっていますか。

市長／はい。これも3月16日の地震の時は、酒田市震度5弱でしたでしょうか、かなり揺れたなということで私も驚いたのですが、あの時、実は、職員の招集のシステムがうまく機能をしておりまして、安否確認システムというのがあって、市の職員とそれから消防団、それからコミュニティ振興会の役員の方々、1,000人あまりの方々に情報発信をしております。

それを受けて、特に、市の職員は参集するということが可能な職員の回答が627人だったということもあって、かなり職員がすぐ機敏に反応してくれたという印象を持っております。そういう意味では、この災害に対応できる体制、初動としては、うまく機能しているという評価を私はさせていただきました。その上で、避難所に関しては、コミュニティセンターに配置する支部指定職員ですとか、学校に配置する避難所の連絡員も含めてですが、しっかりとその連絡調整する体制は、機能していたなど、そのような理解をしております。

とりわけ夜間、深夜でしたので、ああいう時点でどうかという思いもあったのですが、その参集をする、或いはそれぞれの施設に職員が行くってということについては、しっかり機能していたと思っております。

実際に被害は基本的にはなかったわけなので、そこまでの検証しかできてないわけですが、今後もやはり大地震への備えということからすれば、実際の総合防災訓練みたいなことをしっかりやらないと、災害が出たとき、或いは避難されている市民の方々が、避難所に集まってきた時、どのような体制で運営できるかということはやっぱり実証できませんので、しっかりそういった訓練はやっていきたいと、このように思っております。

前回も少しお話しましたが、今後の災害訓練の予定については、10月29日に、これは酒田市大火があった日なのですが、昭和51年に大火が起きて46年目を迎えますが、今年その日に総合防災訓練を予定しております。県、それから消防、警察、自衛隊などとの関係機関との迅速な情報共有ですとか、或いは支援依頼等が、スムーズにできるか、その辺の訓練もしっかりしていきたいと思っておりますし、また災害対策本部を立ち上げて情報収集だったり情報伝達だったり、或いは広報や各機関との連絡調整訓練なども、その場でやりたいと、このように思っております。

また、民間施設を活用した24時間津波避難ビルへの対応と、そういった訓練なども、住民を巻き込んだ形でやりたいと、そんな思いを持っております。この津波避難ビルについては、庄内JAビルですとか山形新聞のビルですとか、それからベルナル酒田、

リッチ&ガーデン、セレモニーホール酒田とか、浸水エリアの中で、ある程度大きな建物を持っている民間企業の皆さんにお願いをして、住民がそこに避難をすると、そういった訓練なども行いたいと考えております。

それからいつもこれは問われるわけですが、自主防災組織を中心とした地域単位の訓練、こういったことで、自助、共助、公助の力を高めていく、そういった災害対応能力というのは、やはり普段の様々な訓練で培われるものだと思いますので、自主防災組織の皆さんとも連携をしながら、その総合防災訓練の時に限らず、可能な限りそういう訓練をして、地域全体の防災力を高めるような活動、それは促していきたいなど、このように考えております。私からは以上です。

■フリー質問

【代表質問関連】

記者／代表質問の補足ですが、ロシア、ウクライナの関係ですが、サンクトペテルブルク市の方には、お礼状というか、返信ということだと思うのですが、これはいつ頃でしたでしょうか。

市長／3月18日です。

記者／それに対する反応は、今のところはないですか。

市長／今のところはないです。

記者／今回プレスステージ・インターナショナルさんと連携した対応ということを考えていることでしたけれども、市の担当部局というのは、特段今まで想定していなかったですがどこで担当されていますか。

市長／プレスステージ・インターナショナルさんとの連携ということから考えると地域創生部、ただ、避難者ということになりますと、やはり市全体で横断的に目配せをしないとはいけなところがありますから、市長公室あたりから少し差配をしてもらいながら、やればなどこのように思っております。

記者／関連してなんですが、友好交流事業に関して、具体的に取り止めになったとか、延期になったというのは、どのような内容でしょうか。

市長／本間家の歴史だとか、本間家が明治の初期の頃には日本でも有数の長者だったとか、酒田の歴史に係るものを展示してもらったのですが、それは、サンクトペテルブルク市の酒田光陵高校と交流ある学校で展示会をしてもらいました。かなり好評でした。その話がジェレズノゴルスク・イリムスキー市にも実は伝わって、自分のところでもやりたいという話でした。データを送れば、簡単にできるわけですが、本来であれば、ひょっとしたらもう今月とか来月に実現していたかもしれないような交流事業だったのですが、今こういう状況なので、保留をさせていただいている。具体的に影響があった交流事業といえばこの事業であり、酒田の歴史をジェレズノゴルスク・イリムスキー市の皆さんにお知らせする、そのパネル展示の事業を、少し待ったをかせせてもらっ

ているのが今の状況です。

あと今年度、ジェレズノゴルスク・イリムスキー市とは2年に1回、行ったり来たりするという交流をする予定だったのですが、コロナの関係で元々予定はなかったです。**記者**／今ちょうど酒田光陵高校さんの話も出てきましたが、ロシア語を勉強している、そういった科目、そういったカリキュラムがあるということをお聞きしてはいるのですが、なかなかこういった状況になるとロシア語を学ぶとか、子供たち或いは公益大さんもそうかもしれませんけども、学生さんがロシアのことを学ぶとなると、気後れするとか、意味があるのだろうかみたいなそういうことを考える子も多分いるかもしれないと思うのですが。

市長／いるかもしれないですね。でも先ほども言いましたように、ロシアの国民の皆さんとか、ロシアの文化だとか、例えばロシア語を学ぶとかということは、こういったことで影響を受けてはならないだろうなと思います。かつて、日本はそういうアメリカとの戦争で日系人が大変悲惨な経験がありますよね。そういうことはやっぱり私はすべきでないと思いますので、高校生の皆さんが、将来、国際人になる方であろうともそうでない人でもあっても、ロシア語に興味があるのであれば、ぜひロシア語は学んでいただきたいし、ロシアの文化にも触れてもらいたいし、日本とロシアの交流ということについても、しっかり取り組んでいただけたらありがたいなと思います。

国と国とのこういった戦争ということが、そういう若い人たちや、文化にも影響を及ぼすということを、特にロシアの国を率いている方には分って欲しいです。戦争は、やはりやってもらいたくないなと思います。

記者／今の確認ですけど、サンクトペテルブルク市で、本間家の展示をしたのはいつのことですか。

交流観光課長／2021年の9月1日から14日です。

市長／9月1日から14日、2週間ですね。これは実は、このメッセージのところにもありますけれども、啓翁桜が縁でサンクトペテルブルク市と私ども交流をしてきていまして、その中で出てきたのが、学校同士の協定を結んで学校同士の交流をしましょうという話が出てきて、サンクトペテルブルク市の市内にある二つの学校、これは中高一貫校でいいですかね。

交流観光課長／はい。

市長／向こうの学校のシステム上は中高一貫校なのですが、こちら側は、酒田南高校と酒田光陵高校と2校がそれぞれ学校同士で交流をしようということを、協定を結んでおりました。具体的な交流の中身は、コロナがなければ、あの時南高校の学生さんがロシアに、サンクトペテルブルク市に行く予定だったのですが、コロナで行けなくなった。今のこの戦争ではなくて、実際には行き来の交流はしてないのですが協定自体はできていまして、これから交流をしようという矢先に、コロナがきてそして今回のこのウクライナ侵攻が出てきたということで、ストップがかかってしまったということになります。

記者／姉妹都市のジェレズノゴルスク・イリムスキー市が40年以上ということでした

が、簡単にどういうきっかけで交流を始めたのですか。

市長／その当時、日ソ沿岸市長会議というのがあって、しばらく新潟市が会長なのですが、日本海側の沿岸の日本の都市と、その当時はソ連でしたが、ソ連の都市とで組長さん同士の会議の場があって、そこで姉妹都市交流みたいな話が話題として持ち上がったときに、ジェレズノゴルスク・イリムスキー市と酒田市とがタイミングがあって、結んだと。ジェレズノゴルスク・イリムスキー市はバイカル湖の東シベリアです。例えば、新潟はハバロフスク市だったりしますし。山形市もどこかと結んでいます。

記者／当時流行りだったという感じだったのですか。

市長／流行りと言ったら流行りだったかもしれないですね。毎年のように我々も交流していたのですが、なかなかやっぱり、行き来が不便です。酒田から行くと、丸2日、3日かかります。飛行機でイルクーツク市まで飛んで、そこからまた汽車で行ったり車で行ったりするのですが、飛行機で行くことも可能ですが相当時間がかかるものですから、やはりちょっと毎年の交流は厳しいということで、2年に1回の交流に切り換えたのが、3年前ぐらいです。

交流観光課長／平成29年度に行ったときに、1年おきにしましょうとなったものです。

市長／今はコロナがきたので、行けなかったということで、それで途絶えています。

記者／関連ですが、細かいところの確認で、サンクトペテルブルク市の方はその向こうから市長のお誕生日にあわせてお手紙があって、それに対して返事という形でされたということなのですが、例えばこのジェレズノゴルスク・イリムスキー市に関しては、こちらから、市長の方から先方にお渡ししたということでもいいのですか。

市長／そうです。さっき言ったいわゆる写真展みたいなものを、やりたいです、やりましょうかという話をメールで担当課がやりとりしていたのですが、メールでは少し失礼かなということもあり、こういう状況で私としても、ロシアのウクライナ侵攻については、一定程度事実として交流している町の皆さんからも知ってもらいたいという思いがあったので、正式文書という形で差し上げたということです。

サンクトペテルブルク市に対するこういう文書での返信ということもあったので、ここは姉妹都市ということもありますので、正式な文書という形で、こちらの考えを向こうの市長にお伝えをしました。市長から市長へのメッセージとしてお伝えしました。

先ほどの交流の件は担当者レベルでのメールのやりとりだったものですから、ここはやはりこの時節柄、姉妹都市の市長に対しては、明確に日本の交流市として市長としては考えをお伝えしたかったという思いから、文書で差し上げたという次第です。

記者／展示の一旦保留のお話もこのタイミングぐらいで向こうにお伝えされたという理解でよろしいですが。

市長／はい。

記者／市長のお誕生日に合わせて、お手紙をいただいているのは、サンクトペテルブルク市さんから毎年ですか。

交流観光課長／昨年からです。

市長／2回目かな。サンクトペテルブルク市はさっき言いました高校生同士の交流もあって、実はオンラインでしたが、向こうの副委員長さんとは、去年の1月だったか、やりとりをしています。ある意味、そういう意味ではジェレズノゴルスク・イリムスキー市よりは、ちょっと密接な接触があったものですから、わざわざ誕生日にメッセージをくださったのだと思います。

ただその誕生日のメッセージの後に、このロシアの弁明に繋がるような書簡がまたきたのです。なので、二つの文書に対して、まとめて、この返礼の文書をこれで差し上げたということになります。

記者／今の話ですけれども、お誕生日のメッセージはもともとサンクトペテルブルク市の市長からでしょうか。副委員長さんからでしょうか。

市長／去年はグリゴリエフ対外関係委員長さん、副委員長さんの上に委員長がいて、私どもがサンクトペテルブルク市に行った時に、手厚いおもてなしをしてくださったのが、グリゴリエフ対外関係委員長です。

今年はなぜか前回オンラインでやりとりしたのがこの副委員長さんだったものから、この副委員長さんが私にメッセージをよこしたと。

記者／その後に、ロシアの事情を説明する書簡みたいなのが、また向こうから送られてきたのですか。

市長／そうです。それも副委員長名できました。3月7日は私の誕生日なので、誕生日メッセージがきたのです。その後3月11日に、また二の矢が来たのです。

記者／差し支えなければ、簡単に一言で言うとどんな内容ですか。

市長／ロシア語が分からないので訳したもので、ちょっと読みますので、メモしてください。

サンクトペテルブルク市の対外関係委員会名できていまして、副委員長となっております。

「尊敬する丸山様、サンクトペテルブルク対外関係委員会は、現在ウクライナでの状況に付随して、緊張が高まる国際情勢について、以下のことをお伝えいたします。現在私たちは、ロシア連邦全体及びサンクトペテルブルクに対して、明らかに友好ではない動きを感じております。私たちは、欧米に支配された多くの情報元が公然と不正確な情報を流し、国際社会におけるロシアの信用を失墜させようとしていることを、確信を持って断言します。ロシア軍がウクライナにおいて行っている特別軍事作戦の目的は、同胞であるロシア語系の住民を、ウクライナの極度に民族主義的な現政権による大量虐殺、虐待、基本的権利の侵害から保護することであることを指摘したいです。

ロシア人、ベラルーシ人、ウクライナ人は、これまでの複雑な関係や国境による分離があろうとも、一つの民族であることに変わりはありません。私たちはすべての人々に現在起こっている出来事を慎重に評価し、将来の世代に対しての自分たちの行動と言葉に対する責任を忘れないように求めます。

世界の歴史的経緯を見れば、ソビエト連邦が 20 世紀に世界をナチズムから解放するために果たした役割の大きさがわかります。そのおかげで、世界の何十カ国もが国家を維持し、植民地から脱却することができたのです。ロシアは、第二次世界大戦の終結から 77 年目の今日、アメリカとイギリスの同盟国から核兵器、生物兵器を手渡されたネオナチがウクライナに現れることを防ぐために、この特殊作戦を実行しなければなりません。サンクトペテルブルクのすべてのパートナーに呼びかけ、敬意を持って意見交換し、既存の分野での協力関係を維持することが必要だと考えています。そうすることで、より大きな成果が得られ、すべての国の人々の安寧と調和のとれた発展、そして幸福が実現されるのです。

私たちは、酒田市の皆様と協力しながら、民主主義、平和、自由、法の尊重、平等、近隣諸国との協力と友好など、あらゆる人々にとって最も大切な価値の実現を常に目指して参りました。これまで築いていた協力関係を高く評価し、今後も緊密で友好的な関係を継続することを願っております。パートナーの皆様には、NATO 諸国とキエフの反人民的政権によるイデオロギーの神話や、メディアの直接的な偽情報、偽りの情報に惑わされることなく、バランスのとれたスタンスを維持していただくことをお願いいたします。 対外関係委員会副委員長 カルガノフ」

という内容です。多分私どもだけでなく、こういう文書がいろいろなところに出しているのかもしれないです。

記者／その文書に対するサンクトペテルブルク市への返事の位置付けは何でしょうか。

市長／私のとこで出した文書ですか。

記者／そうです。タイトルとか特になかったので、どういう位置付けで酒田市として出したのかなと。

市長／基本的には、誕生日のお礼の返信書ですが、この文書に対する返信書でもあるわけです。

記者／これが二つの文書の返信ということですか。

市長／はい。

記者／もう一つのジェレズノゴルスク・イルムスキー市に対するこれは。

市長／これはやはり、あえて言わせてもらえば、今回のロシアの行った行動に対する、姉妹都市としての市長としてのメッセージを発信させていただいたということかなと思います。

記者／メッセージということ。

市長／やはり、先ほどウクライナ避難民に対する受け入れの話はしましたが、何らかの行動を取らなくてはいけないと、特に長年ロシアとの交流をやってきた自治体の長の責任として、意思表示をしたかったということもあり、サンクトペテルブルク市にもやりましたけれども、ジェレズノゴルスク・イルムスキー市に対しても、意見を述べさせてもらったということで捉えていただければと思います。

記者／プレステージ・インターナショナルさんと連携しているという話は、今それを先

方の会社と打ち合わせしている段階でしょうか。

市長／一応、社長とも話をしまして、そこはもう合意ができておりますので、もし具体的に来るといふ話になれば、もう速やかにその体制を整えたいと思います。

記者／実際来るとなったら酒田市としてすることというのは、さっき言った生活物資の支援でしたり、通訳の支援ですか。

市長／もちろんプレステージ・インターナショナルさんも、酒田に一定の施設があり、託児所もあれば働き場としてもおそらく提供してくれる。おそらく、そういう話になっていくと思いますので、そういったプレステージ・インターナショナルさんと連携をしながら、行政としてやるべきところはどこなのか、それからプレステージ・インターナショナルさんはこういうところは担っていけるということであれば、そこはお任せしつつということで、その辺の相談をしていきたいなと思います。

■その他

- ・特になし